

NACSIS-CAT レコード調整方式検討ワーキング・グループ

報告書

平成 18 年 3 月

NACSIS-CAT レコード調整方式検討ワーキング・グループ

目 次

1 . ワーキング・グループの目的	1
2 . 議論の経緯	1
3 . 具体的方策	2
4 . 課題解決に向けて	4

別紙 1. ワーキング・グループメンバー一覧・活動記録

別紙 2. レコード調整用標準フォーマット

別紙 3. コーディングマニュアル第 21 章改訂素案

別紙 4. 運用注記に関する提案

1. ワーキング・グループの目的

「国公立大学図書館協力委員会常任幹事館と国立情報学研究所（以下、NII という。）との業務連絡会」の下に設置された「書誌ユーティリティ課題検討プロジェクト」（以下、課題検討 PT という。）の最終報告において提示されている「NII アクションプラン」に基づき、NII では、平成 17 年 11 月に NII の図書館情報委員会の下に「NACSIS-CAT レコード調整方式検討ワーキング・グループ」（以下、WG という。）を設置した。WG はその目的を「現在の図書書誌レコード調整ルールでは、作成館にかかる責任・負担が大きいため、早急に新しい方式の検討を行う」こととし、新方式についての検討及び提案を早急に行うために、設置期間を平成 17 年 11 月～平成 18 年 3 月の 5 ヶ月間とした。WG のメンバーは国・公・私立大学図書館にて実際にレコード調整を担当している外部委員 10 名と NII 側担当者 2 名の構成とした。メンバー及び開催状況は別紙 1 のとおりである。

2. 議論の経緯

WG では、まず、現状での参加館の目録作成現場から感じる問題点・課題についての議論を行い、以下の点が指摘された。

(1)不公平感の存在

- ・ 「共同構築」「書誌共有」の理念のもと運用されている NACSIS-CAT だが、実際には、新規に図書書誌レコードを登録しているのは全参加館の 1/3 にすぎず、残り 2/3 は所蔵登録のみか所蔵登録も行っていない参加館である。
- ・ 書誌レコード作成に予算と時間を割いて貢献すればするほど、作成館責任による半永久的な書誌レコードのメンテナンスの責任が増大し、人的、予算的負担が大きくなる。そのコストを嫌い、書誌レコード作成自体を行わない参加館もあるため、結果として、一部の参加館の献身的な貢献により NACSIS-CAT は成り立っている。

(2)参加館内における意識・スキル・環境の差

- ・ 基準を満たす書誌レコードを慎重に作成している参加館がある一方、安易に基準を満たさない不適切な書誌レコードを作成している参加館がある。
- ・ 既存書誌レコードへの対応についても、規則に従って適切な修正を行う参加館がある一方、安直な修正を行い、かえってレコード調整を発生させている参加館もある。また、記述に不明確な部分があっても相当数の参加館がレコード調整を行わないまま所蔵登録を繰り返したことにより、結果としてレコード調整の負担が増大してゆく傾向がある。
- ・ 組織内で十分な人材育成が行える参加館がある一方、目録担当部署に図書館専門職が必ずしも配置されず、かつ組織内に相談できる相手もいないという参加館も相当数ある。

作成館の負担を少しでも軽減しつつ、より「公平」なレコード調整方式の実現について検討を行い、「共同構築・書誌共有型総合目録データベースである NACSIS-CAT における図書

書誌レコードの品質とは何か」との原点に立ち戻り議論を重ねた。その結果、本WGとしては、「総合目録において、資料の同定・修正等のためのレコード調整は必要不可欠な手順であり、単にかかる労力だけを懸念しその作業を省略化することは、NACSIS-CATの品質維持に逆行することでしかない」との結論になった。また、併せて、以下の原則の再確認を行った。

- ・ 課題検討PTで問題となった「レコードの品質維持」とは、言い換えれば「新規に書誌レコードを作成する際の品質維持」であり、全参加館は、新規図書書誌レコードを登録する際、目録規則等に沿った正確なレコードを作成する義務がある。
- ・ 正確なレコードの作成を行えば、NACSIS-CATの品質が維持されるだけでなく、その後の作成館としてのレコード調整の負担をも防ぐことになる。品質管理において、これ以上の改善策はない。

ただし、この原則を全参加館に再徹底し実現させるためには、NACSIS-CATにおける参加館の在り方、参加館全体の意識及びスキルアップの方策（研修等の改善）、関連マニュアルの改訂、システムの改良等、多方面での根本的な対策が必要であろう。

以上の議論を踏まえた上で、WGでは、早急の実現可能で効果があると思われる応急策の検討を行った。

3. 具体的方策

3.1 参加組織情報への連絡先情報の記入必須化

書誌レコードの修正の内容に応じて、他所蔵館への連絡が必要となっているが、レコード調整連絡に必要な情報（CATDEPT、CATTEL、CATFAX、EMAIL）が、参加組織レコード内に記入されていない場合があるため、連絡作業に支障をきたしている。

現状でも、参加組織レコードの正しい記入・管理は、各参加館の責任となっているが、NIIから全参加館に対し、その原則を再度確認し、連絡先（CATDEPT、CATTEL、CATFAX、EMAIL）記入を運用上「必須」として徹底するとともに、参加組織情報の変更を適宜更新することを義務づけていくことが確認された。

3.2 修正後の所蔵館連絡のNII代行範囲の拡大

3.1同様、書誌レコード修正後、所蔵館へ修正が必要な場合において、現状では、所蔵館数の多寡（所蔵リンク数20館を目安）により、NIIへ連絡を代行依頼できるか否かを区別しているが、この20館という目安に特に妥当性はなく、また、所蔵リンク20館以下の書誌レコードの修正報告を受けたとしてもNII側で作業量の変化に大きな差はないため、現状の「20館」との目安を廃止し、所蔵リンク館数に関わらず修正後の所蔵館への連絡をNIIに代行依頼できる方針に変更する。

3.3 レコード調整用標準フォーマットの提示（別紙 2-1・別紙 2-2・別紙 2-3 参照）

レコード調整において発見館等が作成館等に連絡を行う場合に、必要な情報が不足しているがために何を聞きたいか、何を連絡したいかがスムーズに伝わらないケースがある。また、経験の浅い参加館にとっては、レコード調整連絡の際に、何をどのように記述すればよいのか自体に悩むケースもある。

そういった状況を改善し、より円滑にレコード調整連絡が相互に行えるよう、WG にて FAX 及び e-mail 用の「レコード調整連絡のための標準フォーマット」を作成し、広く参加館に提供する。

なお、この「標準フォーマット」を作成する際には、次の点を考慮した。

- ・ レコード調整の全種類に共通して利用できる書式とする。
- ・ 用件のみを簡潔に伝えられる書式とする。

3.4 コーディングマニュアル「21.1 図書書誌レコード修正事項一覧」の見直し（別紙 3 参照）

書誌レコードを修正する際に、レコード調整の有無の判断基準となるのが「21.1 図書書誌レコード修正事項一覧」である。この一覧を再検討し、レコード調整に伴う作業の軽減を目指した。作成館との協議・修正後の所蔵館への連絡を必要とする項目の削減、発見館の修正権限の強化などが提案されたが、コーディングマニュアル全体を視野に入れ、細部にわたって検討する必要があることが明らかになった。このため、WG における検討のみで結論を出すことは控え、素案の提示にとどめることとした。なお、この件について、出された主な意見は以下のとおり。

- ・ 作成館との協議を必要とするものについては、新規書誌レコード作成ならびに同定識別のポイントであるため、安易に協議不要とすることは NACSIS-CAT の原則から外れることになる。
- ・ 単純に発見後に必要な作業を減らすことよりも、21.1B[修正事項一覧]の項目立て自体が適切なかどうか検討する必要がある。
- ・ 項目立ての検討においては、NACSIS-CAT/ILL Q&A DB に繰り返し登場する質問に対する対応を、実例と共に[修正事項一覧]へ取り込んでいくことを視野に入れることが重要である。
- ・ コーディングマニュアル他章の細則との整合性が保たれているのかどうか確認する必要がある。

3.5 NOTE フィールドへの運用注記の記入（別紙 4 参照）

書誌レコードの同定には、記述されている書誌記述以外にもそれまでのレコード調整の履歴の確認が必要になることがあるが、現在の書誌レコード上では確認するすべがない。そのため、複数の参加館が同一内容について、作成館に問い合わせを行うなど、

作業のロスが生じている。

その対策として、書誌レコードにおいて、詳細な修正履歴の情報の記録や運用注記専用フィールドの新設が望まれるが、各参加館のクライアントシステムでの対応が必要になるなど影響が大きいと、当面の策として、現行の NOTE フィールドに運用注記を記入することが有効であり、WG では、NOTE フィールドに運用注記を記入する際のガイドライン及び注記例を提示する。なお、英語版の運用注記についても検討したが、すぐには対応できないことが考えられるため、洋書誌レコードの運用注記については、「英語で記述することが望ましいが、日本語で記述することも可能」とした。

4. 課題解決に向けて

本 WG では、総合目録データベースでの品質低下を招かず、また、NACSIS-CAT 創設当初からの「共同分担」という理念を保つ方向で検討を行った。

当面の応急策として 5 項目を提示したがいずれも対症療法にすぎず、根本的な解決策とはならない。レコード調整にかかる負担を根本的に軽減し、参加館の負担・責任の不均衡を是正するためには、参加館が主体となって、NII と協議・検討する組織を早急に立ち上げ、NACSIS-CAT の原則、理念の見直しをも視野に入れた本質的な改善を行うことが必要である。

以下に、WG で議論された根本的解決のために必要な改善策をあげる。

4.1 書誌レコード作成時の品質維持

レコード調整の発生を未然に防ぐためには、書誌レコード作成時における品質の維持をはかることが重要であるが、実際には、人員削減・人事異動による人材育成の土壌の弱体化や、低コストでの NACSIS-CAT 書誌レコード作成基準に満たない仕様書をもとにした外注などが、品質劣化の原因となっている。適切な品質の書誌レコードを作成できる環境を整備するために、下記の制度・体制の実施を要望する。

- (1) 組織経営陣に対してアプローチできる図書館評価
- (2) 目録業務外注の適正価格の提示、仕様書内容の検討
- (3) データ作成者（外注業者等も含む）への充実した研修体制
- (4) 資格・認定制度の確立

4.2 コーディングマニュアルの改訂

コーディングマニュアルは、技術の伝承、経験の蓄積を補完する存在を目指すべきである。NACSIS-CAT/ILL Q&A DB 内での回答を盛り込むなど、初心者、経験の浅い担当者にも理解しやすく、解釈のコレの生じにくいものへと改訂することを要望する。さらに、第 21 章の改訂とも合わせて、全体的な整合性についても見直しを要望する。

4.3 重複書誌レコードの容認について

版と刷の相違等、同定が困難な書誌レコードについては、一定の範囲で、これまで「重複」としていたものを別書誌レコードとして作成を認めることを検討してはどうかとの提案が出された。重複書誌レコードの容認は、NACSIS-CATの根幹に関わる事項であり、時間をかけた検討が必要であるので、WGからの提案は控えた。

4.4 システムの整備

今回、NOTEフィールドに一定の注記を定型化して記入することを提案したが、これは、フィールド新設などNACSIS-CATの仕様変更を行った場合、各参加館のクライアントシステムにおいても対応が必要になることから、暫定的な代替案として提案したものである。スムーズに各クライアントシステムが対応できるようシステムベンダーと協議の上、書誌レコードに運用注記専用フィールドを設置するとともに、書誌レコード修正履歴を管理・閲覧できるシステムの開発を早期に実現すること要望する。

4.5 NACSIS-CATの新しいビジョン

「共同分担」、「無料」、「作成館責任」などの理念から見直すことも視野に入れ、NACSIS-CATのあり方を根本的に再構築することが必要である。NACSIS-CAT参加ステータスの明確化、資格制の導入、システム整備などを行い、責任の所在、関与の程度を明確にすることを提案する。同時に、参加ステータスに応じた運用費の課金、また責任を担う参加館への補助金の助成についても検討が必要である。

なお、本報告書「3.具体的方策」については、国公立大学図書館協力委員会、国立情報学研究所目録所在情報サービスホームページを通じて各参加館の意見を聴取し、そのフィードバックを受けた上で実現するものとする予定である。

「4.課題解決にむけて」については、本WGから「課題検討PT」最終報告で提示されている「書誌ユーティリティの担い手である大学図書館等の参加館が主体となり、NIIと協議・検討する組織」等に引き継ぎ、十分な検討を行うことを要望する。

以上

(別紙1)

NACISIS-CATレコード調整方式検討ワーキング・グループメンバー一覧

任期：平成17年11月～平成18年3月

氏名	所属・職名
田中道子	北海道大学情報システム課図書館専門員
吉田左貴子	東京大学情報管理課主査・目録情報係長
赤井規晃	京都大学情報管理課資料管理係
田中由紀子	九州大学コンテンツ整備課電子化係長
芳鐘文子	一橋大学学術・図書部学術情報課図書情報係長
田村俊明	大阪市立大学学術情報総合センター図書情報課
土居純子	同志社大学総合情報センター学術情報課資料管理係
木下祐子	立命館大学図書館サービス課課長補佐
古川千佳	佛教大学図書館専門員
磯野肇	奈良大学図書館主任
茂出木理子	国立情報学研究所開発・事業部コンテンツ課 課長補佐
岡田智佳子	国立情報学研究所開発・事業部コンテンツ課目録情報管理係長

NACISIS-CATレコード調整方式検討ワーキング・グループ活動記録

		活動内容
平成17年	11月22日	第1回ワーキンググループ開催
平成18年	2月1日	第2回ワーキンググループ開催
	3月1日	第3回ワーキンググループ開催

レコード調整 (FAX送信票)	問合せ
-----------------	-----

送信先	< = = = =	発信元

送信枚数(この用紙含めて)	枚	送信日	年	月	日
---------------	---	-----	---	---	---

1. 書誌ID	
2. タイトル	

3. フィールド名:内容	
4. 問題点	
5. 根拠	手元資料 コーディングマニュアル 目録規則() その他()
(詳細)	

備考: ご確認頂き、折り返しご連絡ください。

返信欄

以 上

レコード調整 (FAX送信票)	連 絡
-----------------	-----

送信先	< = = = =	発信元

送信枚数(この用紙含めて)	枚	送信日	年	月	日
---------------	---	-----	---	---	---

1. 書誌ID	
2. タイトル	

3. フィールド名:内容	
4. 問題点	
5. 対 処	ローカル書誌修正 所蔵付替 その他()
(詳細)	

備考: ご確認頂き、折り返しご連絡ください。

返信欄

以 上

下記の体裁をテキスト形式で提供するものとする。

< 問合せ用 >

宛先: ppppp@aaaa.mmmmm-u.ac.jp
件名: レコード調整<BA71929302>(問合せ)

大学図書館 係 御中

書誌ID =
タイトル =
フィールド名: 内容 =
問題点 =
根拠 =
根拠詳細 =
備考 =

大学図書館 係 担当:
TEL: 99-9999-9999 FAX: 99-9999-9999
E-mail : pppppp@aaaaa.mmmm-u.ac.jp

} 発信者の連絡先等を明記した署名

< 連絡用 >

宛先: ppppp@aaaa.mmmmm-u.ac.jp
件名: レコード調整<BN13317424>(連絡)

大学図書館 係 御中

書誌ID =
タイトル =
フィールド名: 内容 =
問題点 =
対処 =
対処詳細 =
備考 =

大学図書館 係 担当:
TEL: 99-9999-9999 FAX: 99-9999-9999
E-mail : pppppp@aaaaa.mmmm-u.ac.jp

} 発信者の連絡先等を明記した署名

運用注記に関する提案

1. 趣旨

現在の NACSIS-CAT における書誌レコードでは、運用上の必要性から目録規則で注記に記入すると規定されているもの以外の様々な情報が NOTE に記入されている。今回の提案は、目録規則に規定されていないもののうち、既に現在コーディングマニュアル等で記入することが定められているものに加え、一定の注記を定型化して記入することにより、参加館同士での書誌レコード及び資料現物確認作業を減らし、レコード調整業務を軽減することを目的とするものである。

2. 現在記入することが定められているもの

1) 遡及入力に関するもの

***遡及データをもとにした流用入力である

***記述は遡及データによる

2) 稀覯本に関するもの

和漢古書につき記述対象資料毎に書誌レコード作成

3) 書誌レコードの分割に関するもの

VOL: 以降は別書誌 <BAxxxxxxx>

VOL: 以前は別書誌 <BAxxxxxxx>

VOL: - は別書誌 <BAxxxxxxx>

1),2)の注記に関しては、当面現行通りの運用を継続する。3)については、平成9年4月1日以降はVOLによる新たな書誌の分割は行わない方針(オンライン・システムニュースレター No.58 (1997.03.10))となったが、システム上の理由(VOLの繰り返し回数による制限)等から現在も行われている(Q&A DBで管理番号A000025000,A000205200,A000437000等を参照のこと)。今後もこの運用を継続するのであれば、コーディングマニュアルに記入例を掲載することが望ましいと考えられる。

3. 現在記入することが定められていないもの(記述様式が定型化していないもの)

1) 類似書誌レコードがあるにもかかわらず別書誌レコードを作成したことの根拠に関するもの

- 例：出版者の相違による別書誌あり
- 例：装丁と出版日付の相違による別書誌あり
- 例：ページ数の相違による別書誌あり
- 例：大きさの相違による別書誌あり
- 例：シリーズの有無の相違による別書誌あり
- 例：シリーズの相違による別書誌あり

2) 同一書誌レコードとして扱う資料間に見られる相違に関するもの

a) 初刷のバリエーション

- 例：奥付の出版日付が異なるものあり：yyyy.mm

b) 初刷以外の資料による情報

- 例：第 x 刷では表紙のタイトルの誤植修正済
- 例：第 x 刷では標題紙の責任表示の誤植修正済
- 例：第 x 刷の奥付に記載されている初版第 1 刷の出版日付：yyyy.mm
- 例：第 x 刷(以降)の出版者(名称変更)：
- 例：第 x 刷のページ数：x, xxxp

上記の事例に関しては、記入することが望ましいと思われるものについてコーディングマニュアルに記入例を掲載する。1)については新たに作成した書誌レコードだけではなく、元々あった書誌レコードについても同様の注記を記入することが望ましいが、記入する場合にはその書誌レコードの作成館に連絡して修正してもらう必要があり、レコード調整業務の軽減という趣旨からはずれることになる。また一方の書誌レコードに記入されていなくとも他方の書誌レコードを見れば別書誌レコードを作成した根拠が判明することから、連絡については不必要としても問題はあまり生じないと考えられる。なお、書誌レコードの新規作成及び同定についてはコーディングマニュアルの規定に従って行われることが前提であり、注記を記入することによりこれらの業務が不必要になるわけではないことに留意する必要がある。

4. その他の提案

刷によって微妙な相違が見られる資料が存在するので、書誌レコードの作成単位となる版の初刷以外によって書誌レコードを作成した場合、よりどころとなった刷を注記に記入することを推奨する。

例：記述は第 x 刷 (yyyy.mm) による

この注記は、記述が初刷と同一であると確認した際、または初刷に基づいて書誌レコードを修正した際に削除するものとする。

なお、現在のコーディングマニュアルには複数の出版物理単位からなる書誌の記述に関する以下のような記載があるので、上述の提案内容をこの文章を修正する形で追加するというを考えてもよい。

2.2.7.F2.1 オ) 記述の基盤についての注記

最初に刊行された資料以外の出版物理単位(巻・冊)によって書誌レコードを作成した場合、記述の基盤とした巻・冊について注記する。

以上